

Drug survival rates of biological disease-modifying antirheumatic drugs and Janus kinase-inhibitor therapy in 801 rheumatoid arthritis patients: a 14 year-retrospective study from a rheumatology clinic in Japan

近藤, 正一

<https://hdl.handle.net/2324/2236336>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (医学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

(別紙様式2)

氏名	近藤 正一				
論文名	Drug survival rates of biological disease-modifying antirheumatic drugs and Janus kinase-inhibitor therapy in 801 rheumatoid arthritis patients: a 14 year-retrospective study from a rheumatology clinic in Japan				
論文調査委員	主査	九州大学	教授	新納 宏昭	
	副査	九州大学	教授	小田 義直	
	副査	九州大学	教授	園田 康平	

論文審査の結果の要旨

申請者らは関節リウマチ (RA) における 7 つの生物学的疾患修飾性抗リウマチ薬 (bDMARDs) と 1 つのヤヌスキナーゼ (JAK) 阻害剤の長期成績を調べることを目的とし、2003 年から 2017 年の間、我々のリウマチクリニックを受診し、bDMARDs と JAK 阻害剤で治療した 801 例の RA 患者を後ろ向きに、薬剤の継続率、薬剤の中止率と薬剤スイッチ率を調べた。薬剤継続率は 1 剤目 (ナイーブ) で投与した患者でみると、トシリズマブ (TCZ) が 6 年目で 77.8% と最も高く、次いでゴリムマブ (GLM) : 61.5%、エタネルセプト (ETN) 48.9%、アバタセプト (ABT) : 41.6%、インフリキシマブ (IFX) : 34.5%、アダリムマブ (ADA) : 34.4% であった。薬剤をスイッチすると継続率が減少した。中止率は副作用による例は 2 年以内に多く、効果不十分による例は 6 ヶ月以内が多かった。これらの結果は日本の 1 つのリウマチ専門クリニックからの長期間にわたる多数例の RA 治療報告であり、bDMARDs の継続率を高くするためには、容易に薬剤をスイッチする前に適切な薬剤を選択し、投与量を最適化させ、薬剤効果を長期間継続させることが重要であることを示唆する。

以上の成績はこの方面の研究に新たな知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験結果などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについても適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。